

オウム原理主義者の告白

(オウム・マインドコントロールの論理を暴く)
はじめに

聞き手 猪瀬正人

一九九六年も暮れに差し迫った十二月十日、東京・新宿のトーク居酒屋「ロフト・プラズワン」で、オウム真理教の元信者である僕は、新右翼の鈴木邦男さんとオウム問題について論を闘わせていた。

演題は「オウムの真相」というもので、「オウムとは何だったのだ」ということを明らかにし、元信者としての自分の経験が他の人たちに少しでも役立てばと思い、翌朝まで討議を続けたのだった。

深夜に差し迫った頃、休憩時間にトイレに立ったとき、一人の男がいきなり僕に近付いてきて、握手を求めてきた。

「やあ、猪瀬君、久しぶり」

彼は右手で、僕の右手を力強く握ってきた。

それが高崎博充氏だった。わざわざ名古屋から僕に会いに来てくれたという。

高崎氏は、オウムの防衛庁のナンバー2だった人物である。オウムの防衛庁というと、実刑判決を受け、もう既に出所した岐部哲也氏ばかりが取り沙汰されたが、実際の現場を担当していたのは高崎氏である。高崎氏は音楽班にいて、麻原彰晃にドラムを教えたこともある。また、オウムが本格的な軍事訓練を始めたとされる「ロシア射撃ツアー」にも参加している。僕も教団在籍時に、ある程度の面識があった。もうオウムの教団を出ているという。

年が明けて、一月末に再会したのだが、彼の話を聞いて仰天してしまった。彼はいまだ麻原彰晃を信じており、その信仰心はますます深まり、そのために残りの生涯をかけるというのだ。万が一殺されるようなことがあっても、麻原彰晃に対する帰依を貫き通すというのである。オウムのことを遠い世界のように感じ始めるようになっていた僕にとって、それは驚愕すべきものだった。

僕がオウム真理教に引っ張ってきてしまった人物に土谷正実という男がいる。彼はサリンを製造した張本人であるのだが、法廷で謝罪をすることもなく、次のように意見陳述した。

「一九九一年に出家を果たして以来、麻原尊師は私に対して多くの秘儀を伝授してくださいました。

そして麻原尊師のボアの技法によって、私には神聖天から超越童子天にいたるまでのさまざまな上位形状界（色界）の経験と、非形状界（無色界）の経験が順次与えられ、そののち私は完全なる絶対なる一元の世界・ニルヴァーナ（涅槃）へと誘われたのです。、
なわり、ヒナヤーナの完成に導いていただきました。

これらの経験を得た以上、どのような状況になろうとも、私の麻原尊師に対する信が揺らぐことはありません。数多くの弟子たちに、至上の宝ともいふべき数々の体験をお与えになり、究極の真理の道を指し示された偉大なるグルに巡り会えたことを、私は心から

誇りに思っております。

そして、麻原尊師への帰依を貫徹して死ぬことこそ私の天命であると考えております。最後に、『現代の日本人がバルドー（注：死後直後から再生に至るまでの中間状態）を乗り切るとは至難の業である。しかし、そのための方法論・修行体系がオウム真理教には存在し、実践することによって必ず答えが得られるのだ』という言葉をつけ加えるとともに、偉大なる完全なる絶対なるグル、麻原尊師の勝利を祈願しつつ、意見陳述を終えたいと思います」

これを聞いて僕は棍棒で殴られたようなショックを受けた。そして、土谷をオウムに連れてきてしまった者として責任を感じ、手紙を送ったり、公判を傍聴して目で訴えかけたり、いろいろな形で彼にメッセージを送っているのだが、どうすることもできない。土谷は麻原彰晃と殉死するつもりでいるのだ。

しかし、その土谷正実と同じくらい、あるいは彼以上に麻原彰晃に対する信仰心を燃やしているのが高崎博充氏だ。

原理主義という言葉がある。自分たちの信仰、信念に対して忠実で、それゆえに非妥協的であり、その言動は過激なものとなる。

まさに高崎氏は、土谷とともに「オウム原理主義者」というべき人物である。高崎氏も、土谷と同じように「一元の体験」をし、麻原彰晃に対する信は死んでも揺るがないと豪語している。もうイチちゃっている人なのだ。

高崎氏には「ヴァジラスポータ（金剛の破裂）」というホーリーネームがあり、「その名の通り、尊師のためにこの現状とぶつかり、破裂したい」と願っているそうだ。

その高崎博充の言い分を僕は十時間にわたって聞き、それをここに再録した。

オウム真理教の中にいる人たちは口を閉ざしている。いまだオウムや麻原彰晃を信じている人物に、「なぜ、あれほど悲惨な事件を起こしているのかかわらず、そこまで信じるのか？」について赤裸々に語らせた最初の試みだと思う。オウムの現信者を呪縛しているマインドコントロールのからくりが明かされるであろう。

現実社会に埋没しつつある僕には、彼ら「オウム原理主義者」の主張には全くついていけない。彼らの言い分を認めるつもりはない。

しかし、破壊活動防止法の適用がなされず、オウムが存続することが決定した今こそ、彼らの主張をここで俎板の上にのせて、切り刻んでいかなければならないのではないだろうか。それによって、オウムがしてきたというマインドコントロールの実態が解明されるだろうし、現在もオウムにしがみ付いている教団の現信者の社会復帰の手助けになるだろう。

高崎氏自身も、対話の中で述べている通り、いかなる非難でも、誹謗でも受けてたつという。高崎氏の一途さには疑いがない。これを読んで、高崎氏をはじめとする「オウム原理主義者」の心の内を理解し、彼らに対してどんどん揺さぶりをかけていただきたいと思います。もちろん、僕もライフワークとして地道にそれを実践していくつもりだ。

本書の内容は、

第一章は、高崎氏がオウム真理教に入った理由と出家生活の中身について。

第二章は、一連の事件について、これだけ真相が明らかになった今、なぜ彼がそれでも信仰を続けているのか、事件についてどう考えているのかについて。

第三章は、そのオウムや麻原彰晃に対して信仰を抱きつつ、これから彼がどこに向かうとしているのかについて。

この本が、マインドコントロールの構造を説明しようとしている心理学者、社会学者などの有識者の研究のため、あるいは、身内や親しい人がオウムの「グルイズム」に巻き込まれて、何とか救い出そうとしている方々が、いまだオウムにしがみついている現信者の心の真相を理解する手助けになれば幸いです。

オウム・マインドコントロールの解明と、それを乗り越える道が提示されることを願っています……。

はじめに

第一章 オウム原理主義者・高崎博充、半生を語る

オウムに入った理由、そして出家生活

グルであった親、そして忌野清志郎

閻魔大王・麻原彰晃との出会い

驚異の出家生活

LSDでアストラトリップ

ロシアで軍事訓練、そして教団を出る

強烈なフラッシュバック

第二章 オウム原理主義者が見た事件の深層

坂本弁護士事件の嘘

「ボア」という思い込み

真理を守る?

井上被告について

オウムの危険な歴史観

救済活動?

グルイズムについて

「尊師にボアされてもいい」

第三章 いったい彼らはどこへ行くのか

ハルマゲドン

現教団を批判

巻末・参考資料

麻原彰晃 八九年九月二十四日の講話より

「前生の因縁——カルマの法則の恐ろしさ」

九四年三月二十七日の講話より

H・J 獄中手記

おわりに

に第一章 オウム原理主義者・高崎博充、半生を語る

オウムに入った理由、そして出家生活

グルであった親、そして忌野清志郎

——まず、高崎さんがどういう家庭に生まれ、何故オウムに入ったかということをお聞きしたいんですけども。

高崎 出身は長崎で、家は金光教という、日本神道に属する宗教団体の教会長の家に生まれました。両親が教会の教師という立場です。まあ、幹部というよりまさに教師で、キリスト教でいう牧師や神父のような立場ですね。信者が数十人いて、定期的に礼拝とかお祭りのようなことをしていました。豪華な神棚みたいなものもありました。

——高崎さんはその信仰を持っていたのですか？

高崎 僕は生まれながらにそういう環境だったから、みんながそういう信仰の中で生きているんだろなあ、という気持ちで生きてきました。物心つく前から、食事をする前は神様に対する感謝の意を表したり、朝起きたときや夜寝るときは、「ご祈念」という祈りを親と一緒にしていたよね。

——学校へ行き始めてから、他の人とギャップは感じませんでしたか？

高崎 ええ、他の家とは違うんだな、ということを経験することを小学生に入ってからして感じました。教会長の息子なんだなあ、ということを経験するようになりましたね。信者さんもたくさんいましたから、「いい子」にしなければならぬという親の教育もありましたし、僕自身いつもきちんとしなければならぬという思いは、最初からあったという感じですね。そして、月二、三回会合があつて、そのときは信者さんと一緒に金光教の教典の読経をしたりしてました。

小学校の頃は、信仰に関してほとんど違和感がなくて、親に言われた通り、自分の悩みを金光教の神様の「金光様」に向けて祈っていましたね。

——僕は金光教の教義を知らないんですけども、そういうものだったのですか？

高崎 百数十年前に、身分の低いある農民が神の啓示を受け、それを中心に輪が広がっていった新興宗教で、神と人との共栄の世界が実現すると説いていました。

神は人間に対して子供のよう慕っているんだけど、僕たちの心がいらぬものに向いて、神に向かつていないために、神の恩恵というものが理解できないんだよ、と。だから、僕たちが神に意識を向けることによって、神の果報が返ってくるもんだよ、というものです。

神の概念としては明らかに「一神教」でした。例えばイスラム教のアラーとか、キリスト教のヤハウェというものに非常に似たものです。

——そして、高崎さんはそれを信じていたんですね。

高崎 ええ。だけど、その信仰を持って違和感を持たなかった頃はよかったんですけども、小学生の高学年の頃から段々変わりました。

非常に自分は「いい子」だったんだよね。近所でもいい子であつて、学校でもいい子であつて、授業参観のときなどベタ誉めで、で、成績も上位クラスで、学級委員長は小学校でも、中学校でも毎年やってました。

それだけでなく、例えば絵を描けば必ず賞をもらっていたし、運動会ときはほとんど

一番だったし……。だけど、そうであることが友達の嫉妬をかって、「高崎君はいいよね、何でもできるから」というような嫉みの視線を受けるようになってきちゃって……。僕自身は男の子とか女の子とか関係なく付き合っていたつもりなんだけど、だんだんみんな色気が出るようになってきて、僕のやっていることや存在そのものがみんなの心の中に嫉みの気持ちを与えて、仲違いさせるようになっていくことに気付いたんだよ。それに対して悲しくなって、今まで親が言ってきたことや教育してきたことが、あるいは学校の先生や大人たちがいいとしてきたことが、実は大きな不和をもたらしていることに気付き始めたんだよね。なんか全然違うじゃないかって、だまされているんじゃないかって思い始めてきた。

——なるほど。いい子であることによって、友達の間で嫉妬とか競争心が出てきて、仲違いしてしまうということですね。

高崎 だから、親が言うような「いい子になれ」というようなことにとらわれているよりも、友達の中で好きなことを伸び伸びとやっていた方がすごく楽しかったし……。そういった意味で、一体親は何を僕に教えてきたんだ、という疑問がすごく出てきた。神様なんていつているけれども、何もやってくれないじゃないか、この世の矛盾を解決できないじゃないかという思いがすごく出てきたんです。

——それはいつ頃のことですか。

高崎 それが小学生の高学年の頃で、神っていうものに対する疑念がすごく出てきた。

でも、まあ、そういう考え方というのは、キリスト教とかイエスのこととかを批判している人たちの思いの中に、共通して存在している概念じゃないかと思うんだよね。一体、神やイエスが何をやってくれたんだと。僕もそういう思いに非常にとらわれるようになっていた。

——なるほど。中学や高校に行ってからはどうでしたか？

高崎 で、中学校に入って劇的な出会いをしたんだけど、それがロックだったんです。これが僕のすべてを変えてくれた、と言えるぐらいの本当に衝撃的な出会いだった。

何で、そんなに衝撃的だったかという、まあ、たかが子供じゃないかというかもしれないけれど、子供の視野っていうのは確かに狭い。でも、狭い中で自分のすべてをぶつけようとしているわけだよ。耳から入ってきたその音楽というものは、僕にとってもう全世界を覆すほどの衝撃的なものだったんだよね。今でもはつきり憶えている。

具体的にいうと、「RCサクシジョン」というバンドで、忌野清志郎の声だった。

——ああ、知っています。

高崎 で、清志郎の声にまるで自分が歌っているような、自分がそこで歌っているような感触というのが、声のヴァイブレーションそのものにあったし、歌っている内容もまさに自分が直面していた大きな矛盾や、混乱の中にいた自分を代弁してくれたものだったし……。何にもまして、彼が親とか大人とか先生とかの忠告を受けない、完全に逸脱した中で解放感というものを非常にクールに歌っていたから、その爽やかさに僕はものすごく引かれてしまった。

そう、こんな曲もあった。「みんなウソばかり、ウソばかり、ウソ、ウソ、ウソ……」って泣きそうな声で歌うんだよ。あと、「役立たずの神様！」って。あれはショックだった。もちろん僕もそう思っていたけれど、あんなでっかい声で歌って神様が恐くない

のかなって思った。

——それいうところに引かれて、ファンになって、自分でもバンドをやるようになったんですね。

高崎 うん。それ以来、もう清志郎にぞっこんで、彼の出す曲がどんどん出てきたんだけど、それがまさしく自分の精神状態を先乗りしていて、まさしく同じバロメーターで生きていた。シンクロニシティっていうのかな。それぐらい彼の世界の中に入っちゃった。夢にはボンボン出てくるし、出会ってから約十年の間、潜在意識の一部分が完全につながっていたと思う。身長と体重が清志郎と全く同じになって、ピタッと止まっていた。これどう思う。

——へーえ。

高崎 で、オウムに入ったら身長が伸びてしまったんですよ。出会ってからオウムに入るまでの約十年の間、見えない部分で繋がっていたと思う。

——十年というと、オウムに出家するまでということ？

高崎 うん、出家する直前まで。実際、東京に出てきてから会ったりしたし、実は僕がテーマになった曲も作ってくれた。

——本当に？

高崎 それ、CDに出ている。それは「あの娘の神様」という曲。僕がオウムに入る前に付き合っていた彼女も清志郎の大ファンで、それで僕がオウムに出家したってことを切々と書いた手紙を清志郎に渡したんだけど、それを清志郎が見て、僕に対するメッセージとして作ってくれた曲なんだよ。

——へえ、そうなんですか。

高崎 清志郎は両親に続く、僕の二番目のグル（師匠）だったんだ。自分が思ったことを彼も思っていた、まさに生き写しっていう感じだったね。清志郎と言葉を交わしたのは数回しかないけれど、彼も僕に対して親近感を持っているということを人伝えに聞いています。

——「あの娘の神様」ってどんな曲なんですか？

高崎 歌の内容は、心の隙間を埋めるために、あの人は宗教っていうのを求めていったという感じで、で、私はあの人の寝顔を見ているだけで、それだけでよかったのになって言っているんだよね。で、私はこの世の中の奇跡なんか信じない、奇跡なんか呪っちゃうよ、と。

清志郎はその当時の僕の彼女の気持ちを代弁しているんだろうけれども、この世の奇跡を呪うよってことだった。それを非常にやさしくフォーク調で歌っていた。まるで「オウム被害者の会」のテーマソングになりそうな曲なんだよ。

実はTBSの「筑紫哲也のニュース23」っていうテレビ番組があるでしょ。清志郎の曲がエンディングテーマに使われていたときがあつて、それが取りやめになるときに、清志郎がテレビに出演したときがあつたんだ。そのときに筑紫さんからインタビューを受けて、「実はこれから歌う曲は、私のレコードもたくさん買って、コンサートにもいつも来てくれた、たいへんなファンの人がいて、今オウムに出家している人がいるわけだけれども、その人に書いた曲です」と言っていて歌っているんだよね。

——へえ。それはオウム事件の後なんですか？

高崎 後じゃなくて、九二年のことだね。そういうことがあったんです。僕はもう出家して、後で聞いたんだけど……。

でも、このグルと想っていた忌野清志郎に対する信仰がどんどん崩れていったときがあったんだよね。それは自分にとってすべてが変わる時期だったと思うんだけど。

当時、僕は高校を卒業して上京していて、専門学校に通ったり、アルバイトをしながらバンドを組んでドラムをやっていたんだけど、反原発運動が盛んになって、清志郎が『カバーズ』というアルバムを出して、世の流れに対して一石を投げようとしたんだよね。で、彼は「原発なんかいらねえ、俺たちは単に牛乳を飲みながら長生きしたいだけなんだ」という歌を歌っていて、その歌が圧力によって東芝EMIから発売中止になったときがあった。

—— ああ、ありましたよね。

高崎 それに対して清志郎は怒り怒っちゃった。国家とか権力に対する横暴さに非常に怒ったんだ。で、それに対して僕は応援したくて、断固として戦わなければならぬって彼に何枚もの手紙を送ったんだよね。それに対する回答だと思うんだけど、あるラジオ番組で「今回の問題に対して、ダラダラと手紙を書いて送ってくるやつがいるんだが、そういう説教染みたことを俺は聞きたくない」ということを言ってきた。それから彼がどういう行動に出たかという「しょうがないんだ、これが世の流れなんだ」というもので、僕にはそれが妥協しているふうに見えた。負けだんだと。

それまでも、彼は絶えず僕たちの期待を裏切ってきて、それが爽やかに見えて好きだったんだけど、今回ばかりは正面から戦ってほしかったなあという期待があった。それが見事に外されて、「ああ、自分はこの道で生きる人間じゃないかもしれない。中学生のときからバンドでドラムやって何年間も希望を抱いてやってきたけれど、ほかに道があるんだ」って思うようになった。

で、自分たちがやっていたバンドもライブハウスでガンガンやるようになっていて、いい線までいってただけでも、やっぱり他のメンバーとの意見の違いもあった、信頼が崩れていったし、当時付き合っていた彼女との関係もどんどん悪化していった。

要するに、お互いがお互いになってほしい「理想像」をもっているんだけど、その食違いやすれ違いが目に残るようになってきた。彼女にはたくさんの男友達がいるし、僕も女友達はいたし、そういうお互いの交友関係に対してものすごく嫉妬というものを抱いて、だれどお互いは執着し合っているという、もうがんじがらめの状態になって、もうかなりヘビーな状態をお互いが生じさせてしまった。何もかもドン底だったよ。もう彼女を殺そうと思ったくらい。

それで、精神科医のカウンセリングも受けるようになって、ゼロから出発だと思った。—— それは何歳のときなんですか？

高崎 二十一のときです。それから心が内側に向かうようになって、精神世界に興味を持つようになったんだよね。例えばたくさんの夢を見るようになったりしたので夢判断をしたりだとか。

そして、いろんな精神世界の本の中で、シャリー・マクレーンの本を読むようになって「カルマ（業）の法則」に出会ったんです。その「カルマの法則」っていうのは、「為したことは返ってくる。為したこと以外返ってはこない。偶然なんて存在しない」という

自分の中での新しい思想だったんだけど、そのときに、自分は過去においてどんな悪いことをして、こんなに苦しむんだろうと考えるようになった。さぞかし僕は付き合ってきた彼女とか多くの人たちに対して苦しみを与えてきたんだろうと考えるようになったんです。

それで、シャーリー・マクレーン自体、チベットとかインドなどの東洋思想を受け入れていたから、僕も東洋思想を背景とした「修行」をしたいと思うようになった。清志郎にしても、東洋医学とかヨガをやっていたし……。

それに、音楽そのものが突き詰めていけば「精神世界」そのものだし、まあ、音楽だけでなくあらゆる芸術・文化がそうだと思うんだよね。それは宇宙飛行士が宇宙から帰ってきた後、その多くが宗教家になるのを見てわかると思う。つまり、世の中突き詰めていけば精神世界である。

閻魔大王、麻原彰晃との出会い

それならば、もっとダイレクトに精神世界を知る必要があるんじゃないかと思うようになった。誰か師匠のもとで修行して、その教えを受けたいなあと思うようになったよね。そろそろ本物に出会ってもいいかなあ、という直感的な思いも芽生えてきて……。ちやうどそのときに、バンドで知り合いだった人から半年ぶりに電話があって、会って話してみたら、彼の方から精神世界の話を切り出してきて、僕も「それってカルマの法則のことじゃないの。それってチャクラのことじゃないの」と言ったら、「ああ、そうなんだよ」と驚いて、「ああ、なんだ、二人とも同じことを考えていたのか」という感じになったんだよ。それで見せられたのがオウムの「ボアの集い」というチラシで、二人で一緒にオウムの世田谷道場に行っただけです。

——それは何年何月のことですか？

高崎 ええと、八九年の九月の終わり頃。オウムが選挙に出る半年くらい前の頃ですね。僕はその当時、尊師の選挙区だった中野区に住んでいて、ポスターをちらほら見ていたんだけど、最初見たときは、レゲエでもやっている人なんかあ、と思ってた。チラシを見て、「ああ、こういうことをやっているんだ」と興味を持って、友達と一緒に道場に行っただけです。

そのとき、初めて会ったのが、ミラレバ正悟師（当時・大師）こと新実智光さんだったんです。最初は笑いをこらえるのに大変だったね。頭を丸めた、妙に不器用な人が前に立って、「麻原尊師のエネルギーが込められた甘露水を配ります」とか言って、僕はこんな微温湯を飲めって言われても困るなあ、と思っていただけだね。

まあ、その後、ビデオを見て、新実さんと面談になったんだけど、隣で面談していたラーフラ大師ことTさんが、「実は私は隣にいるミラレバ大師と前生で戦ったことがあるんですよ」と話していて、それを聞いて「わあ、すごい世界だなあ。そんなことをニコニコしながら堂々と話している人がいるなんて」ということに驚きがあった。

シャーリー・マクレーンも修行やチャネリングをやって前生を思い出していくんだけど、本当に修行によって前生を思い出してそういう力を得て、当たり前のように話している人をこの目で見て、非常にショックを受けたし、感動もした。

——オウムの人たちは前生を自慢しますもんね。

高崎 で、僕は新実さんに、「最近、カルマの法則を知って、心が楽になったんですよ」という話をしたら、それを新実さんは素直に聞いてくれて、「それは一つの悟りですよ。あなたは絶対やるべき人です」と言われて、勧められた。それに対して全然悪い気がしなくて、もう五日後にはまた道場に来て、入信してしまった。

その頃僕は金髪で、格好は派手で、悪魔のような格好していたのに、オウムの人たちの受け入れ方というのは包容力を持っていたし、うれしくてバクティ（奉仕活動）とか修行を喜んでいるようになってしまったね。同じような体験を僕もしたいと思ったし……。

—— 初めて麻原さんに会ったときはどうでしたか？

高崎 入って二カ月ぐらいたったときに、初めて尊師と数分間面談したんだけど、もうそのときは圧倒的存在感というか……。ちょうど尊師の後ろにすりガラスの窓があって、逆光が射していて、周りには十人くらいの師（幹部）が蓮華座を組んで座っていて、そのシチュエーションがまたすごかった。閻魔大王の前に出て、裁きを受けているような、あるいは完全に教えを乞う立場にいるような気がした。僕自身そういう対象を求めているといえ、求めていたんだけれども。畏敬の念を抱かざるをえなかった。

ビートたけしの「教祖誕生」という映画があるけれども、ああいう、一芝居やってやろうって感じじゃ、ここまでできるわけないって、他の信徒さんの真摯な姿を見てても感じていたけれど、会ったとき本当に本物だと思ったね。

面談のときの尊師の回答というのが、またたいへんな示唆だった。担当の師にザンゲをした方がいいって言われて、そのつもりだったんだけど、僕はザンゲってものがよくわかってなくて、それよりも自分の存在を見てもらいたい知ってもらおうという思いで尊師に「僕の前身はどういうものだったのですか」と質問したんだよね。

ところが、尊師の回答は「君は信徒歴も浅くて、ザンゲがどういうものか全く理解していない。帰依マントラを伝授するから、その修行をやってなさい」と言って、僕は突き放された。

それで、僕は啞然として、思いっきりプライドが傷付いたんだけど、逆にこれで終わっちゃ示しがないぞと。傷付けられた状態でノコノコと逃げていくようじゃ、俺も大したことないなと思って発奮して修行をやるようになったんだよね。

で、一カ月後にまた面談があって、今度はある程度教義を理解してザンゲをしたんだけど、それは僕が生まれながらに外道（仏教以外の宗教）の宗教をもっていたいへん苦しんでいましたと。苦しいことがあったりしたら、今でもその神様を呼んだりしますと。だから僕は無知を試うことができないで尊師の教義をまだ全部理解することができませんと。そうザンゲした。

そしたら、今度は逆に、尊師は「この子はよく理解している。だからもう少し高度な修行法を伝授するから、〇〇師、教えてやってくれ」といって修行法を教えてもらったんだよ。その答え方というのがあまりにも両極端で、何百人と面談を受けていたんだけど、前のことを憶えてらっしゃったんだと。前の僕の傷付いた心を察してらっしゃるんだと、すごく信を持つようになった。

—— なるほど。たしかに、そういう察しのよさが彼にありましたものね。

高崎 この人はわかってらっしゃるんだと。それで僕はだんだんはまっていったって、とんとん拍子に、次の九十年の四月に出家した。

あまり僕は神秘体験をしないタイプだったんだけど、周りの信徒さんはみんなしていたんだよね。空中浮揚の前段階のことが起こっていた人もたくさんいたし、前生を思い出している人もいた。天界のヴィジョンを見たとか、予知夢を見るようになったとか。それに対して悔しさがあつたし、自分にそんな体験がないのは汚れが多いからだとかわかっていたので、もっと修行をやる必要があると思った。石垣島へ行つて出家を勧められて、もうまさにとんとん拍子という感じ。

僕の中でも、これ以上の世界観はないだろうと思つたし、オウムほどプロフェッショナルな精神世界を知らなかったし、行き着くところまで行くしかない、やれるところまでやるしかないと思つたんだ。

それに、もしある一つのことを達成しようとするならば、それを体験している人の言うことを忠実に守れないと最短の道は歩めないと思うんだよね。これは習いごととか学校の勉強でも何でも当てはまるんだと思うけれど……。だから、「出家しなさい」と言われて、ちよつとした葛藤があつた後、決心した。

驚異の出家生活

それで、「これ以上の世界観はない」と確信して出家したんだよね。それが、九〇年の四月。

——出家してから配属された部署やワークの内容などを簡単に話していただけますか。
高崎 はい。

まず、最初に清流精舎（山梨県富沢町）へ行つて、一カ月くらい修行をした、それから東京の方でビラ撒きを、これも一カ月くらいして、その後、阿蘇の波野村の道場の建設に行つた。

そこではもう地獄絵図を見たね。山の気候は激しいから、日の当たっているときは灼熱地獄で、日が沈むと寒冷地獄。みんな真つ黒になりながら、早朝から晩までがんばつて耐えていた。僕は道路班という部署に配属された。道路を整備するワークなんだけど、昼間に業者から碎石を買つてきて、重機を使つて整備しても、夕方になるとよく雨が降つてきて崩れて、また次の日に作り直したりと、その繰り返しだったね。あるいは、プレハブの側溝を作つていたんだけど、雨でそれが詰まつて、その詰まりを取つたりとか。もう泥まみれになりながらやつていたね。自分がこうやつて苦しむのは、自分の中に苦しみの因があるからで、それが悲しかったし、本当につらかった。

唯一の楽しみは、ハエがたかったオウム食で、それをガツガツ食べて十キロも太つてしまった。

——いつまで波野村にいたのですか？

高崎 それがその年の十二月いっぱいまでで、それから東京に出て「蓮華亭」という弁当屋のワークとかをしていた。四月になつて、店が仕事の大失敗をして潰れちゃったんだけど、そのとき尊師が面談してくれて、教団が新しく始める「死と転生」という、有名な『チベット死者の書』という経典をもとにしたオペレッタのドラムをやることになった。それが九〇年の六月。

そのオペレッタは、麻原尊師が総指揮、総監督して、踊りの素養のある人たちが抜擢されダンスを踊り、バックは尊師が作詞・作曲したものをシンセサイザーで奏でたり、ある

いは照明や香りを使って、人間が死んで再生するまでの中間状態、バルドーというんだけれども、そのバルドーの状態を克明に、ダンスオペレッタとして表現したものなんだよね。その中でドラムを叩いてました。

——高崎さんやっていたドラムは、ロックのドラムでしょ。オウムの教義でいうと、ロックスっていうのは地獄の音楽で、否定されなければならないんじゃないですか？

高崎 でも、それをよくよく聞いてみると、ロックすべてというわけじゃなくて、要するに暴力的なところ、精神的に粗雑な部分とか、排他的な心の働き、嫌悪。そういったものは確かに地獄の要素であって、ベースなどの低い音、重圧感のある低いメロディの旋律、そして暴力的なドラムの音というものは、確かにわたしたちの意識をそういう世界に固定させてしまうと思うんだよ。だから、ドラムを担当させられるようになったときは、まさにこれは教団の地獄のカルマを自分が背負わされたという葛藤があったね。

——高崎さんがドラムをやることによって、地獄のカルマを背負うと？

高崎 うん。尊師から「お前がドラムをやれ」って言われていて、言われている限り、それを全うしなければならぬわけで、自己保身のエゴとの葛藤ということだね。でも、それも観念的な見方で、ドラムが入ってパワーがついて、かっこよくなった曲もあるけどね。

——それはいつまで続けたんですか？

高崎 九一年からその年いっぱいが日本ツアーで、で、九二年に入ってからロシアとスリランカまで行ってやった。

ただ、九二年に入ってから、井戸班でもワークやることになって、音楽班と兼ねるようになった。音楽班は九二年いっぱいまで終わったけどね。

——じゃあ、それからは井戸班中心と。井戸班の仕事って単純作業ですよな。

高崎 そう、それも辛かったけれど……。まあ、実績としては、上九一色村や清流精舎、松本支部など、オウムのほとんどの井戸にリーダーとしてかわった。

だから、第七サティアンの真下に掘られている井戸、サリンの残留物が捨てられたと報道された井戸も、私がリーダーとして掘ったし……。

やっぱりいつもドロドロになって、辛かったね。阿蘇を開拓するときの道路班もそうだったけど、井戸班のときも二十四時間体制で、雨が降ろうが雪が降ろうが、夜中ずっと起きていて交代でやらなければならぬし、それに井戸を掘るとき、物凄い音がするんだよね。その大音響の中だったし……。たいへん辛かったです。

——逃げ出そうとは思わなかった？

高崎 いや、ある時期から尊師が時折、井戸小屋に来るようになって、「どうだ、進み具合は？」って聞いてくるようになった。それが励みになったね。それは、僕が手掛けた一本目の井戸で、第二サティアンの横の井戸のときだけだ。

——あれ？ あのととき、麻原さんは第二サティアンに住んでいましたよね？

高崎 そう。あのとときはすごかった。尊師の神通力を垣間見ることがたくさんあった。

一番顕著に見たのは、水が出る瞬間だね。井戸っていうのは堅い岩盤を突き抜けたときに水が出るチャンスがあるんだよね。メンバーが素人ばかりだから、掘り方を業者に聞きに行ったりして、帰りぎわに、「やっぱりオウムって恐ろしい人たちだ」って。井戸掘りは危険なので、十年修煉してようやくオペレーターをやらせてもらえるような世界で

しょ。しかも、あの上九一色村あたりの地形はほとんど知られてなくて、業者に聞いてもまちまちで、千メートル掘らなければ水が出てこないって言う業者もいたし、百数十メートルで出てくるという業者もいたけれど、実際掘ってみなければ、水脈にあたるかどうかわからないという状況だったんだよね。

水が出るときっていうのは、岩盤を越えて柔らかい層に入ったとき、水脈にぶつかって出る可能性がある。岩盤っていうのは長いときでは十メートル以上も続くときがあるんだけれど、岩盤っていうだけあって、掘り進めるのが遅くて何十日もかかるときがある。もう、延々とゴリゴリとやっているわけだよ。

それが何日も続いて柔らかい層にズボツと入る瞬間なんてき、ほんと確率としては数日間の中の一瞬だから、もうかなり低いものなんだけれど。僕が機械のオペレーターやって掘っているとき、岩盤から柔らかい層にぐんと入った瞬間「やった！」と、「一日数センチしか進まなかったのが、何日もかかってやっと抜けたんだ！」となった瞬間に、それからものの数十秒後だと思うんだけれど、電話がかかってくるのと、それが尊師で、「どうだ、今の地層は」と言われて、「今ちょうど層が変わったときなんです！」と言って、「そうだろう」と、もう、まさに尊師はわかってらっしゃるという。

尊師は目が見えないわけだし、たしかに隣のサティアンにいたけれど、ずっと瞑想ルームに閉じこもっていたわけで、掘っている状況なんて全く知らされていない。

—— 誰も連絡していないわけですね？

高崎 もしろん。

—— そこには高崎さんしかいなかったんですか？

高崎 僕ともう一人助手がいて、上がってきた泥をかき分けたりしていたけれど。

—— その人が言ったことはありえないんですか？

高崎 ずっと目の前にいたんだもの、絶対にありえない。それに僕たちの方から尊師に直接連絡するなんて考えられなかったし。

—— うーん。

高崎 これと似たケースってのが、井戸班の経験でいくつもあったね。挙げるときりがないほど。

あとは似たようなケースでは、井戸を掘っている掘削機具が数十メートル下の地中に埋もれちゃったときがあるんだよね。本当は水でどんどん押しながら削りカスをどんどん地上に上げて、水を循環させるんだけれど、それがあるとき水の循環がうまくいなくて、完全に埋もれちゃったときがあったんだよね。それを回収しようと思って引き上げたんだけれど、もう引き上げるためのワイヤー自体が切断されちゃって、上がらなくなった。もしそのまま残留した状態だと完全に井戸は潰された状態で、それまでかかった数百万円がパーになっちゃうんだよね。

で、それをクランクで引っ掛けて引き上げる機具を作るのに、徹夜でヘトヘトになりながら、溶接して作って、やっと完成したつとときに、もう体が動けない状態で、「もう、お願いだから休ませてくれ」って相棒と一緒に建築班の部屋の片隅に隠れて寝たんだよ。そうした数分後に、「電話だぞ、電話だぞ」と言われて、「なんだよ、ちょうど休んでいるときに！」と思って電話に出たら、尊師が「どうだ状況は」って。

もう、このときは腰を抜かすほど驚いて、「はいっ、今、引き上げの機具を作って、今

から上げるところです」って。とても寝てましたなんて言えないから。

そうしたら、「そうか、しつかりやれよー」って喝を入れられて、もう一瞬で目が醒めたよ。

—— 誰かが寝たのを見て、麻原さんに連絡したってことはないんですか？

高崎 ない、ない。絶対ありえない。

「寝ていないで頑張れ！」と、もう、尊師のヴァイブレーションがわかって、「はいっ！」って言って、すぐさま起きてやったね。本当にドキッとしたね、このときは。

こういうことは数限りないほど。もう、完璧に読まれているなと感じたね。

この井戸班は九三年いっぱいまで、まる二年間やった。

—— その後は、どういう部署に？

高崎 その後、九四年になってから、第八サティアンでPSI（オウムヘッドギア）の基盤作りを一カ月やってから、毒ガス攻撃から守るためのコスモクリナー作りをした。

四月になって、第七サティアンの井戸を掘ってくれと言われて一カ月ぐらいで掘り上げた。

それからまたコスモクリナー作りになって、六月の国を模した省庁制の編成のとき、そのままコスモクリナーの管理をする防衛庁に入った。

LSDでアストラルトリップ

—— 六月の省庁分けの直前に、「キリストのイニシエーション」（LSDを使用したといわれる）が出家者全員にありましたよね。

高崎 うん。そこでイニシエーション（秘儀伝授）を受けて、個室で瞑想すると、強烈な神秘体験と心の変化をした。少し長くなるけど話してみようか。

生まれて、いろんな経過があつて、今自分がここにいる、そしてこれからもどんな歳をとって生きていかなければならないというような、一般的に言われている「時（とき）」の流れという概念が完全に飛んでしまったね。

もう、過去・現在・未来という「時（とき）」の概念を超えた、本質の世界にどんどん入っていったという感じ。そこで体験している世界というのは、もう何生、何百生、何万生も生まれ変わる間、無始とも言える過去から何度も何度も経験してきた世界だなあ、という思いがその体験の中にあつて、自分が向かうべき本質というのはこういうものなんだなあ、という確信があつた。

このとき、尊師の言われていることよくわかった。それは尊師の一つ一つの法則、言葉、それが単なる思想とか、単なる教科書のようなものじゃなくて、これを言いたかったんだなあということが、バシバシバシバシという感じでわかり始めた。尊師はこの「本質」を言いたかったんだなあ。

—— 具体的に言ったらどういうことですか？ ちょっと抽象的すぎますけれど。

高崎 抽象的といっても、僕にとつてはすべてなんだけれども……。もう、僕が前生も含めてこの世の中で生きてきた過程というのは、まさに暴れ馬とか、大暴れしている、悪鬼というか……。とことんよそ見して、とことん回り道しているような存在だつてことを感じたんだよね。

—— それは輪廻転生において？

高崎 そう、輪廻転生において、そうだったような気がする。魂の流転の中で、私たちが本来向かわなければならぬ道から完全に逸脱して、無意味なことをして、多くの回り道をしてきたんだなという、直観的な認識がそのとき得られたんだけど、僕はもう大悪業を積み上げて世界中を大暴れしていたというか……。

で、そういう自分に、なんとか気付かせようとして、いろんな示唆やリアクションを与えてくれるんだけど、なかなか僕は気付かず、今までいたなあと。その示唆を与える存在というのが、グル・麻原彰晃尊師という人物というか、その本質というのかな……。絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜の無上・最上であられるシヴァ大神であって、あるいは真我（アートマン）とも言えるし、それは「空（くう）」とも言えるし……。

その絶対的な本質から、「気付け！ 気付け！」って言われているにもかかわらず、僕はもうそれを裏切り続けてきたというか……。その本質的な世界を垣間見て、「ああ、僕はここに帰らなかったのか！」って思った。「ここに帰るべきだったんだ」と。

で、「もう私は悪いことはしません！」という、まさに孫悟空の気持ちだよ。悟空が大暴れして、きんと雲に乗って逃げていくのだけれど、雲の間からお釈迦さまの手が出てきて、どこまで行ってもお釈迦さまの手から逃れられないと。お釈迦さまの掌の中で転がされているだけなんだと。ああいう認識と全く同じだった、精神状態としては。どこまで行っても、どこまで逃げ続いても、尊師の手、まあ尊師っていうのは一つの定義だから、「真実」とか「空」といってもいいんだけど、それから逃れることはできないんだと。もう勘弁してくださいっていう感じ。そういうふうに思った。

で、そのとき、完全な「ボア」というものを生じさせた。もう、これは「ボア」としか言いようがない。「ボア」っていうのは、用語としては「意識の転移」というか、高い世界に意識が移行することを「ボア」と言っているけども、その「ボア」の連続が起こったんだよね。

それは、ほんの些細な教義がポツと浮かんできたんだけど、その教義が何でそうなのかと思ったときに、その答えが目の前にあるんだよね。これは非常に論理的な回答なんだけれど、それがだんだん次元を超えた回答になってくるんだよね。だけれども一つのライン上にあるというか。わかるかなあ。

なぜそうなのかと考えると、ああそれはそのためなのか、とわかると。では、なぜそれはそういう意味なのかと考えると、ああそれはこういう法則があるからだ。その法則というのはどういう意味なのかと、どんどんどんどん繰り返していつて、あ、そうか！ そうか！ そうか！ そうか！ っていう、その連続。

そこで、もう、覚醒がどんどん、どんどん、どんどん生じて、意識の広がりがどんどん、どんどん、どんどん広がっていつて、最後に「そうだったのか！」って。ひよつとしたら、あれが「ニルヴァーナ（涅槃）」だったかもしれない。いや、そうでなくても、あの延長線上に間違いなくすべての「本質」が存在するなって思った。そしてバーンと自分が光の中に完全に包まれたというか……。完全なる「ボア」って感じ……。

それで、向かうところは一つだったんだ、と気付いた。だけど、それは一点じゃなくて、「空」なんだよね。「すべて」っというか……。「無」じゃない。無限大の意識というか……。

——もう少しわかりやすく言っていただけですか。

高崎 だから、私たちが経験している現象、世界、いろんな人と出会ったり、いろんな思念がある。これはみんな仏教でいう通り、あるいは東洋の根本思想である「すべては心の現れである」と。つまり、すべては私たちの心の汚れがこのような粗雑な世界を作り出している。この世は私たちの心が作り出した世界であって、幻影である。まさしくそうだとはいふふうに気付いた。

この世界にいろんな生命体がワンサカいながら、当然同じ空気を吸って、同じ太陽の下で生きていながら、それぞれ感じが違う。それはその人の心のフィルターを通してこの世界を見ているわけであって、確かにこの地上に生きているんだけれど、その感じ得ている世界観というのは、全く人それぞれ千差万別であると思うんだよね。つまり、この世の中に実体なんて存在しないってこと。幻影だってこと。心の現れにすぎないってこと。

で、過去を振り返ってみたとき、なんて僕は卑屈で、恐怖に怯えて、粗雑な意識で世界を見ていたんだろうかと。

まあ、よく導師は説法の中で、心の中を「変容」しなさいっておっしゃっていたけれども、最終的にこの現実生活そのものがニルヴァーナと化すんだ、仏陀の浄土になるんだとおっしゃっていたけれど、まさにそういうことかなあと思った。

じゃあ、この認識を現実生活の中で、どう「変容」していくのかというのは、それぞれの手腕にかかっていると思うんだけど……。でも、そういう世界を一気に経験しちゃったから、向かうべき道筋ははっきりした。

——でも、一般的に見るならば、それはLSDという薬物を使つての幻覚の体験に過ぎないんじゃないですかね？

高崎 いや、多くの人たちは、僕の体験を薬物によって植え付けられたもの、というような解釈をするかもしれないけれど、僕は全然そう思っていない。やはり「すべては心の現れ」なんだよね。

薬物というものが一つの道具として利用されたかもしれないけれど、そこで自分が体験しているのは自分の中から派生したものなんだよね。自分が作り上げた世界なんだよね。

だからこれは、薬によって植え付けられた概念でも何でもなくて、私自身が今までの人生において学んできたもの、これは過去生にまで遡るわけだけど、その経験が蓄積された心の深い要素。それを現出させているっていうかさ。

だから、薬物が使われたことに関しては、あ、そうなのか、という感じはあるけれど、決して他から洗脳されたとか、植え付けられたという印象は全く持っていない。

——つまり、心の深い部分を見ただけであって、薬物はその媒体だったんだと？

高崎 うん。それに、そういうイニシエーションを受けなければならなかったというのも、法則から考えるならば、原因があるから結果があるわけで、言ってみればそういう「カルマ」だったと。そういう宿命であったということだよ。誰のせいだとも思っていないし、これは私が避けられなかった体験だったと思う。で、よかったと思っている。

このとき得られた新たな決意というのは、グルの説かれている法則、グルの行動、グルの言葉、ヴァイブレーションだね、それが四無量心（慈愛・哀れみ・称賛・無頓着）そのものであると完全に認識して、グルは本物だと、どこまでもついていける強い弟子になりたいと思った。

——それで、そのイニシエーションを受けて、ホーリーネーム（祝福名）をもらったん

ですよ？

高崎 そう。「ヴァジラ・スポータ」というホーリーネームをいただいた。タイトルは「師」。

意味は「金剛の破裂」っていうんだけど、僕にとって絶妙なほどぴったしというか……。もう本当にうれしかったよね。

それは、今までの僕の、生まれてからこれまでの人生が、まさに抑圧の日々だったんだよね。一見器用に生きてきたんだけど、心の内側には葛藤があって、萎縮した状態だったというか。で、そういう自分の殻みたいなの「破裂」ということを実感した。それによつて「金剛心」にいたるんだと。

それから、文字通り僕はドラムをやっていたし、ロックをやっていたし、まあ、以前の髪型は赤毛のパンクヘアだったしね。それに「パンク」というのは「破裂」という意味だから、なんと尊師はユニークな名前の付け方をするんだろなあと思った。

でも、後になってわかったことだけど、実際は「金剛界曼陀羅」の中に出てくる菩薩で、なんとその形象は逆立つ赤髪。そして、雷鳴の如き破裂音によつて衆生を覚醒させるっていうものだった…。

ロシアで軍事訓練、そして教団を出る

—— そういう名前をもらって、防衛庁に入ったんですよ。

高崎 うん。次官として、長官の岐部哲也さんと一緒にみんなを引っ張っていかねければならない立場に置かれた。

ワークとしては、毒ガス攻撃を防ぐためのコスモクリーナーの製造と設置。尊師をはじめとするご家族の命を守らねばならない、サマナ（出家修行者）の瞑想空間を浄化して、修行を進めてもらいたい。そういう使命感のもとにやっていた。で、コスモクリーナーの故障があつたらすつとんで行って修理したり、全国支部を駆け回ってメインテナンスをしていたよね。毒ガス攻撃から真理の砦を防衛するんだと。

何よりも、尊師の直々の指示っていうのがボンボンきて、例えば、大至急瞑想ルームの空間を変えてくれだとか、東京のヤソーダー正大師の部屋にコスモクリーナーを設置してくれだとか、もう夜通し取り掛かつたし、次に行つたと思つたら、こっちへ来てくれと息つく暇もなかったくらい忙しかつた。逆に、何も無い、メインテナンスだけをやつていればいいというときになってくると、ぼっかり心に穴が空いちやつたみたいで、逆にいらぬことを考え始めて、煩惱的になってしまつていた。それぐらい、忙しいときは自分のことを考えるどころじゃなかった。

そのときの心の状態として、自分の能力はまだまだだという卑屈さと、師という立場の権力指向の両方があつて、「自分はこれでいいのか」という葛藤で全然ワークができなくなったときもあった。そういうときは、長官の岐部さんが「ちよつとゆっくりしろよ」という感じで、休ませてくれたんだけど……。まあ、普段はほとんど、そういうものを振り払って無我夢中でワークしていたけど。

それから、オウムが本格的な軍事訓練を始めたのは、ロシアでの射撃ツアーだと言われているよね。実は僕もそれに参加したんだ。

—— へえ、そうだったんですか。

高崎 うん。第一陣と第二陣があつて、僕は第二陣だったんだけどね。第一陣はもうそうそうたる顔触れで、林泰男さん、平田信さん、井上嘉浩さんとか……。第二陣は二十人ぐらいだった。いまだに逮捕歴がないのは僕を含めた三、四人じゃないかな。

ロシアまで行ってやってきたんだけど、現地に着くまでは何をやるのか知らされてなくて、僕はKGBとか言われても、そのときはさっぱりわからなかった。そもそも、僕は軍事に関することなど興味がなかったし、生まれてこの方殴り合いの喧嘩すらしたことの無い徹底した平和主義者だったから……。

だけど、いざやってみると、成績はよかったね。短銃に関しては、自分でもなかなかセンスがいいと感じられたし、手榴弾もグループの中で一番遠くに投げることができた。本物の武器を初めて手にしたんだけど、特に違和感を感じなかったね。普段使う機械の工具や工作の道具との境界線が見えてこなかった。あえて言うなら、人を殺すことができるということ。でも、包丁でも人を殺すことができるからね……。ただ、弾丸の入っていない銃でも、銃口を人に向けたら、建物に向けたらすると、ロシア人の教官にえらく怒られた。あとは戦車に乗ったり、軍用機を見学したり、宿に戻ったら武術の型を覚えたりした。

「軍事訓練をやったー」って大げさに報道されていたけれど、それほどものじゃなかったと思うよ。山形明君のような、自衛隊の経験者以外は、ほとんどがド素人で、全然頼りなかった。

そんなことより、普段、日本では禁欲的な生活をしていたから、向こうで豪華な食事を出されて大喜びしたり、自由時間にはロシアの街を他の幹部メンバーとぶらついて、食べ歩いたりした。僕もついていったけれど、正直言つて、ちょっと幻滅したね。日本に帰ってから、しばらく性欲に悩まされてしまつて……。一体何だったんだろうって感じたよ。

—— へえ。そういうこともしたんですね。防衛庁のワークはいつまでやったんですか？
高崎 翌九五年の三月末まで。二十二日の強制捜査の入った数日後には、防衛庁は自然消滅してしまつた。とはいっても、グルの意思として、上九一色に最小限の人たちは残つて、コスモクリナーのメンテナンスだけは続けていたけれど。

—— その後は？

高崎 その後は東京へ出てきて、阿佐ヶ谷道場において、現教団幹部の鎌田紳一郎さんともにも多いときには百人くらいのサマナを管理して、ピラ撒きとか署名集めをさせていた。強制捜査のときは、立会人などもしたね。

六月に人事異動があつて、福岡支部に一カ月間、松本支部に二週間、横浜支部に一週間いて支部活動をした。そのときは、一般の人たちに対して実際に会つて、オウムに対するいろんな質問に対して、自分なりに答えたりしていた。その後は、世田谷道場になつて、歌や踊りを使って、オウムを理解してもらおうというイベントを指揮していた。

でも、結局、転々としているから、自分としても非常に不安定になつたんだよね。それで、こんなことで多くの人を引っ張っていきけるのかっていう自己嫌悪に陥つたりもした。それに教団を取り巻く状況もどんどん悪化していったし、オウムもいずれ解体されるだろう、と見越して九月にだまつて出ていった。

あくまでも僕の解釈だけど、もう教団には「尊師」はいないと思つたから……。

その後は、実家に帰ったり、自分が教団にいたとき指導していた信徒の家を転々とした

りして、翌九六年の四月から住み込みで工場で働いたりした。

—— 教団から出ることに葛藤はなかった？

高崎 それは、いたたまれない悲しみというか、教団の人たちに対して申し訳ないという後ろめたさはあった。特に、僕が指導していた人たちに対しては……。尊師に対しても、「これでいいのでしょうか？」という心残りがあった。

強烈なフラッシュバック

しかし、昨年末に、大きな一つの転換というのがあったんだ。

その頃の自分は、完全に尊師から心が外れていた。忘れようとしていたかもしれない。

—— 忘れちゃえばよかったのに。

高崎 いや、忘れることはできないんだ。

で、仕事は昼と夜両方やっていて、どちらも結構体を使うもので、仕事先の人には変な奴だなんてよく言われていたね。もしかすると「オウム」だって噂していたかもしれない。

その頃に、ある女性と恋愛関係に陥った……。

—— えっ、そんなことまで言っちゃっていいんですか？

高崎 うん。もちろん、迷惑がかかるようなことは話さないけど。

今の僕には、過去のことと隠すものは一つもないよ。

で、その彼女は僕の過去、つまりオウムの出家信者だったことを全く知らない人で、そのことが僕にとっては救いだったし、何もかも忘れてたくて彼女に夢中になったりした。逆に元信者として逃れることのできない過去、そして未来が頭によぎると悲しくなったし、沈鬱な気持ちになったりした。それでは、長続きするはずないよね。

彼女はいずれ家庭を築くことを考えていた。まあ、当然だよ。理想の高い人だったと思う。到底、僕はその条件から洩れてしまうから、いろんなことで埋め合わせしようとした。例えば、東洋医学の話をしたり、ヨガの話をしたり、宮沢賢治の資料を集めてやりとりだとか……。それから、歌が二人とも好きだったから、カラオケに行つて、尾崎豊の歌を歌ったりだとか……。なんだ、俺はオウムじゃないかって思ったね。

あるとき、遊園地に行こうつてことで、僕のポンコツ車の助手席に彼女を乗せて向かったんだけど、パトカーがいきなり追い掛けてきて止められた。元オウム関係者つてことで、車のナンバーがチェックされていたみたいで、パトカー三台と白バイ十台くらいに取り囲まれたんだよね。彼女は「なんで、なんで」って言っていた……。結局、警官と言い争いになったりしたけれど、その場はうまく切り抜けた。あのときは最大のピンチだったと思う。僕がオウムだったことを気付かない彼女も彼女だと思っただけ……。

でも、やはり二カ月も経たないうちに別れることになった。彼女もすぐ新しい彼氏を作ったみたい。

僕はもう完全にどん底に陥った。孤独だったし、自分がチリのような存在だと思った。部屋の中で一人うずくまって泣いていたよ。

そのときに思ったのが、「なんだ、自分は何も変わってないじゃないか？」って。その思いは、オウムに出会う前に味わったどん底と全く同じだった。もっと遡ると、母親にわけわからず家の外に放り出されて、真っ暗い中で泣き続けたときと全く変わらないじゃ

ないかって気付いた。で、ひよっとしたら、今が一番リアルな瞬間かもしれないって。それから二日後に衝撃的なものに出会った。それは「虹」を見たんだよね。

——空にかかる虹ですか？

高崎 うん。でっかい虹を見て、僕が車で真ん中を突っ走ったんだよね。そんな虹なんて見たことがなかったし、僕はそれにたいへんな祝福を感じた。チベット仏教なんかでも、虹は祝福されたものとなっているし、自分がその真下をくぐっているというシチュエーションに奇跡としかいいようのないほど祝福を感じた。

——でも、そんなことなんて、今この瞬間でも世界中にいっぱいあるじゃないですか？

高崎 いや、そうかもしれないけれど、僕の中では大きな衝撃だった。

——それは思い込みじゃないんですか？

高崎 思い込みと言われれば、思い込みと言えなくもないけれど……。

じゃあ、逆に聞くけれど、今まで生きてきた中で多くの出会いがそれぞれの人生であると思うんだけど、そのとき「これは衝撃的な出会いだ！」と感じることはなかったかと

——なるほど。

高崎 おそらく、運命的な出会いっていうのは、個人個人の歴史の中で感じているはずなんだよね。とても偶然ではないというような出会い方。それはあると思うんだよ。

つまり、それは心のバロメーターとこの現象というものが完全にシンクロし、「示唆」とか「啓示」と感じることはあると思う。そのときの虹は僕にとって一つの奇跡だった。そして、意識のチェンジ、ポアが起こったんだよ。

それからというものの、出会うものすべてから大きな発見をどんどんどんんしていつて、すべてのものが自分に対して教えてくれるようになった。完全に一つの上昇気流に乗った。精神が高揚していった。

で、過去世で尊師と壮絶な戦いをしたことを思い出したりした……。

今年に入り、ずっと瞑想していたんだけど、明け方まで瞑想していて、もう潜在意識に突っ込んでいるときに、「尊師っていうのは救済者なんだ！」っていう確信、これが沸き上がってきた。そして、「キリストのイニシエーション」の経験が、ほとんど同じようなかたちで記憶の中に甦ってきて、全く同じプロセスを辿った。で、グルへの完全なる確信が生まれた。（注……これは高崎氏が「フラッシュバック」という、過去の経験の追体験をしているものと思われる。猪瀬）

そのとき何を考えたかというと、「この世の中は無常な世の中である。幻影である」と。つまり、今まで無常なものに対してさんざんしがらみを作ってきて、とらわれていたんだと。そのとらわれた意識というものが、本質的な意味で僕を幸福にするかどうかを、自分の中でいろんなシミュレーションを作って検証したんだけど、それはありえないことに気付いた。つまり、結局は苦しみでしかない。

唯一、真実なものは何かというところ、それはマハー・ニルヴァーナ（大涅槃）であると。「空（くう）」の世界であると。そして、それを尊師が経験し、体現し、グルの中に存在しているんだと。

じゃあ、グルっていうのはどういう役目をしているかというと、グルの動きそのもの、言葉、行動、心の働きはすべての魂をマハー・ニルヴァーナへ到らせるための「救済」で

あり、四無量心の現れなんだと。

「そうやってグルの偉大さがわかってきて、私にとって「すべて」であるとかわかってきて、で、それからもう心がパツと変わったよね。「なんて無常なものに俺は今までとらわれていたんだ！」って。もう生まれ変わったようだった。」

グルの偉大さ、真理に対する確信。そして、自分の思念したことがすべて現象化していた。もう、これ以上になくらいヴィヴィットでピュアな状態になった。完全に生まれ変わった、完全に……。

そして、「カルマの法則」というもの、「為したことは返ってくる」という法則で、世界が成り立っているんだということの実感、それプラス、「カルマの法則」によって成り立っている目の前の現象に対して、一切心が左右されない、不動の心の状態が連続するようになった。

そして、人間というのは、いろんな他人との壁を作って生きていくけれども、そういうものをすべて取り払って生きていきたいと思うようになったんだ。

当然、今後あらゆる宗教、国境、あらゆる壁を越えていきたいし、弟子であるからとか、そうでないからとか、内側のものだからとか、外側の問題だからとか、そんなこだわりは一切捨てて、同じ共通の理念が少しでもあれば、いろんな人と協力してやっていきたい。それが、私にできる唯一の償いだと思う。

——？。わかりました。高崎さんがそう思い込んでしまえば仕方ありませんね……。じゃあ、あなたのその信念がどういうものか、追いついていきましょう。